

二〇二〇年度 大妻中野中学校 第三回アドバンスト入試

二月二日午後 問題用紙

国語

座 席 番 号
番

受 験 番 号
番
氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で11ページあります。
 - (二) 試験開始後、解答用紙にページ数を確認してください。
 - (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
 - (四) 座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
 - (五) 試験時間は五十分です。
 - (六) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- この試験は百点満点です。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（なお、解答の際は、句読点も一字に数えます。）

わたしは食器を片付けて、お気に入りのリュックにお出かけの用意をすませると、

「いつてきまーす」

① からっぽの部屋に元氣よく声をかけて、飛びだした。エレベーターを待つ時間がもどかしくて、リュックを背負ったまま、一階まで階段を駆けおりの。

マンションから図書館までは、自転車で五分くらいの距離だ。

風を切る感覚があんまり気持ちいいので、わたしは雲峰池に寄り道をすることにした。雲峰池は大きなため池で、池のまわりは一周二キロの、ちよつとしたジョギングコースになっている。いつもは人通りが少ない雲峰池だけど、毎年この季節だけは、市外からもたくさんの方が訪れる。池をぐるりと取りかこむ桜並木が、満開になるととてもきれいなのだ。もつとも、今日のところはまだ桜もチラホラと咲いている程度で、人もそんなに集まっていなかった。

② 早く満開になってくれないかな、などと考えながら元の道に戻ると、うつすらと汗をかいていた。ペダルをこぐペースを少し落とす。

お母さんは、一年ほど前から地元のミニコミ誌にエッセイを連載している。自分が編集している雑誌に、たまに短い文章を書くことがあつて、それを読んだミニコミ誌の編集長に頼まれたのだ。連載とはいっても、ペースは一月に一回で、今月は「雲峰池の桜並木」がテーマらしい。その締め切りが来週いっぱいなので、もうそろそろ咲いてくれないと困るのだ。

道沿いにチラホラと立っている桜の咲き具合をチェックしながら走っているうちに、図書館が見えてきた。

雲峰市立図書館は、三階建ての立派な建物で、一階が小説と児童書、二階には小説以外の本（実用書というのだそうだ）、そして三階が自習室になっている。

駐輪場に自転車を停めて、建物の中に入る。館内の空気はひんやりとして涼しかった。入ってすぐのところは、新聞や雑誌が自由に読めるロビーになっているんだけど、そこで早速モスグリーンのエプロンを見つけたわたしは、リュックをおろしながら駆けよった。

「こんにちは」

「あら、しおりちゃん」

『お知らせ掲示板』に「おはなしの会のおしらせ」を貼っていた美弥子さんは、わたしを見ると手をとめて、にっこり笑った。やわらかなウエーブのかかった髪が、ふわりと揺れる。

「この前借りた本を返しにきたの」

図書館の中なので、わたしは小さな声で話しかけた。

「あら、もう読んじゃったの？」

③ うん」

わたしはリュックから、三冊の本を取りだした。美弥子さんがすすめてくれた冒険ファンタジーは、主人公の双子の兄弟がとてもかわいく

て、一気に読みきってしまったのだ。

「このシリーズ、まだ続くんでしょ？」

わたしは期待をこめて聞いた。

「たしかに、いまのところ六巻まで出てるんだけど……」

美弥子さんは、困ったような顔で、頬に手を当てた。

「続きはたぶん、貸し出し中だと思う」

「えー」

それは予想していなかった。食べきれなくて半分だけ冷蔵庫に入れておいたケーキが、次の日見たら、なくなっていたような気分だ。わたしがふくれていると、美弥子さんはわたしが手にしていた本をポンポンとたたいていった。

「この本だって、ほかの人にとっては貸し出し中だったのよ」

「うー」

いわれてみれば、たしかにそうだ。わたしは少し恥づかしくなつて、本で顔を隠した。

美弥子さんは、わたしのお母さんのお姉さんの子ども——つまり、わたしのいとこにあたり、大学を出て、司書の資格をとつて、去年からこの図書館で働いている。美人で優しく、わたしの憧れのお姉さんなのだ。そして同時に、^③わたしの本の先生でもある。

「後で新しいおすすを教えてあげるから、とりあえず返却をすませてきたら」

美弥子さんにそういわれて、わたしはロビーを後にした。

一階は、ロビーと、大人向けの小説（もちろん子どもが読んでもいいんだけど、わたしはあんまり好きじゃない）、そして子ども向けの児童書の、三つのコーナーに分かれている。入り口寄りにあるのが大人向けで、奥にあるのが子ども向けだ。そのふたつのコーナーの中間にある貸し出しカウンターには、^④玉木さんがすわっていた。

玉木さんはお母さんと同じ年ぐらいの女の人で、細い銀縁の眼鏡をかけている。初めて見た時は怖そうな人だと思ったけど、いまは^④怖いのではなく、厳しい人なのだと知っている。

わたしは三冊の本をカウンターにおいた。

「返却です」

「あら、しおりちゃん。相変わらず早いわね」

こんな風に図書館の人とお喋りができるのは、^⑤常連の特権だと思う。

玉木さんが、スーパールのレジにあるような機械を本のバーコードに当てようとした時、

「なにすんだよ！」

わたしの後ろを、男の子の怒鳴り声を通りすぎていった。驚いて振りかえると、低学年ぐらいの男の子が、自分より少し大きな男の子を、

走って追いかけていた。兄弟だろうか。ふたりとも笑っているの、けんかではなく、ふざけているだけらしい。

玉木さんを見ると、困ったように微笑んでいた。本当は図書館の中で騒ぐのはよくないんだけど、追いかけてこの程度を注意したらきりがないのよ、と前に玉木さんが話してくれたことがあった。たしかに、本を投げあってけんかされるのに比べたら——前にそんな光景を、一度だけ見たことがある。毎日図書館で働いていたら、もっとひどい光景も見ているに違いない——走りまわられるぐらい、まだましなほうなのだろう。

わたしは「返却ありがとうございます」といってくれた玉木さんに、「どういたしまして」とお辞儀を返して、ぐるりと本棚を見まわした。

さて、今日はどの本を借りて帰ろうか。

わたしは、本が好きだ。本の中身はもちろん、本の重さも、紙のにおいも好きだ。

もちろん、読書以外にも楽しいことはたくさんある。だけど、仲良しの麻紀ちゃんが、ロールプレイングゲームを一か月かけてクリアしたなんて話を聞くと、

「一か月もあつたら、本が何冊読めるだろう」

などと考えてしまう。麻紀ちゃんは「変わってる」っていうけど、わたしには、本にはまらないことのほうが不思議だった。

⑥ 今日はどんな出会いがあるだろう——わたしはワクワクしながら、児童書のコーナーに足を踏み入れた。

棚には色とりどりの背表紙が、作者の名前の五十音順に並んでいる。わたしはその中から、目についたタイトルの本を抜きだした。美弥子さんは「表紙とタイトルを見れば、その本のセンスが大体わかる」といつてたけど、わたしも最近、少しはわかるようになってきた。やっぱり表紙とタイトルが気に入った本は、中身も気に入ることが多い。

ページをパラパラとめくって、面白そうだな、と思ったら手近な机に置いておく。そうじゃなかったら、元の棚に戻す。そんなことを何度くりかえしているうちに、いつのまにか机の上には、四冊の本が積みあがっていた。

一度にあんまりたくさん借りていっても、返却期限までに読みおわらなければ意味がない。このあたりでやめておこうか、それとももっと見てまわろうか——わたしが迷いながら棚をにらんでいると、

ツン、ツン。ツン、ツン。

誰かが服のすそを引っ張る感触があった。振りかえると、小さな女の子がわたしのシャツの端っこをしつかりとつかんで、まん丸の大きな目でわたしを見あげていた。

たぶん、まだ三歳ぐらいだろう。ピンクのブラウスに、赤いスカートというかわいらしい格好が、よく似合っている。

「どうしたの？」

わたしが聞くと、女の子はすそをつかんだ手に力をこめて、小さな声でいった。

「カナのお母さん、知らない？」

「あら、お母さんとはぐれちゃったの？」

わたしは身をかがめて、その子に顔を近づけた。思わずさわりたくなるような、赤ちゃんのほっぺたを持った女の子だ。

図書館には、どういうわけか迷子が多い。そんなに大きな建物でもないのに、小さな子どもが、よくひとりでうろろろしている。そういう時はたいいてい、お母さんが子どもから離れて、二階で⑦編み物の本やお料理の本を見ているのだと、前に美弥子さんから聞いたことがある。「はぐれちゃった？」

女の子はキョトンとした顔で首をかしげて、わたしの台詞せりふをおかしなイントネーションでくりかえした。「はぐれる」の意味がわからないらしい。わたしは丁寧がいいなおすことにした。

⑧？

これだとなんだか、お母さんが迷子みたいだな、と思いながらわたしはいった。

女の子は、しばらく難しい顔で考えていたけど、やがて首を左右に振った。

「一緒にきてない」

「え？」

「カナ、お母さんを探しにきたの」

「探しに？もしかして、カナちゃん、おうちからここまでひとりできたの？」

わたしがたずねると、カナちゃん——どうやらそういう名前らしい——は、今度はすぐにうなずいた。どういふことだろう——わたしは首をひねった。家にお母さんがいなかったから、ここまで探しにきたのだろうか。だけど、お母さんがいないからといって、図書館に探しにくるというのがよくわからない。

「カナちゃんのお母さんは、図書館にいるの？」

わたしが聞くと、

「うん。お母さん、お仕事なの」

カナちゃんはいった。それを聞いて、わたしはふと思いついた。

「もしかして、カナちゃんのお母さん、⑨？」

職員さんの子どもかもしれないと思ったのだ。しかし、カナちゃんは首を振った。

「違うの。お仕事なの」

どうも話がよくわからない。だけど、このままひとりほうっておくわけにもいかないので、とりあえずカウンターに連れていこうと、わたしが机に積んであった本に手をのぼしたその時、

「あ、わたしの本」

カナちゃんが、突然大きな声をあげて、一番上に積んであった本を奪うばいとった。それは、水野遠子みずの とおこという人の書いた、『魔女たちの静かな夜』というファンタジーで、表紙には夜の森でお祭りをしている魔女たちと、ひとりの女の子の姿が描かれている。

「カナちゃんの本なの？」

わたしが首をかしげると、カナちゃんはうれしそうにうなずいて、

「うん。これ、カナの本なの」

両手で本を抱きしめた。

「^⑩それ、絵本じゃないのよ」

わたしはカナちゃんの手から、本をそつと受けとると、中をパラパラと開いて見せた。毎ページに絵がある絵本とは違って、挿し絵は一章に二、三ページしかないし、漢字にもほとんどふりがながついてない。「小学上級から」とは書いてあるけど、この春から五年生になるわたしでも、ちよつと難しいかなと思っていたのだ。

だけど、ニコニコと本の表紙を眺めているカナちゃんを見ると、別にいいか、という気になってきた。きつと、表紙の絵が気に入ったんだろう。それに、カナちゃんひとりでは読めなくても、誰かに読んでもらったら案外楽しめるかもしれない。

わたしは残りの三冊——『海の宝石盗難事件』と『空から落ちてきた魔女』、それから『夏休みの宇宙旅行』を抱え^かると、『魔女たちの静かな夜』を手にしてご機嫌^{きげん}なカナちゃんを連れて、カウンターに向かった。

（緑川聖司『晴れた日は図書館へいこう』ポプラ文庫ピュアフルより 本文を一部改編した。）

問一 —— 部① 「からっぽの部屋に元気よく声をかけて」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア. 何も無い部屋の中で待っている家族に元気に声をかけたということ。

イ. 自分が家を出ることを近所の人に念のため知らせようとしたこと。

ウ. 誰もいない部屋に向かつていつもどおりあいさつをしたということ。

エ. 片付けた部屋を家族に気づいてもらおうと大きな声を出したということ。

問二 —— 部② 「早く満開になってくれないかな」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア. 満開になった桜並木の美しい景色を早く味わいたいから。

イ. 桜が満開になることで母親の仕事が進むと考えているから。

ウ. 自分の住んでいる桜の名所に大勢の人が来てほしいから。

エ. 自分がこれまで見守ってきた桜並木に愛着を抱いているから。

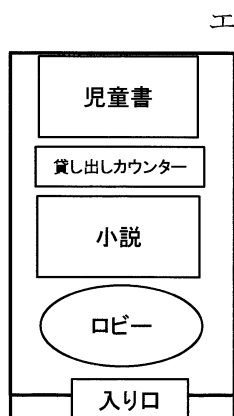
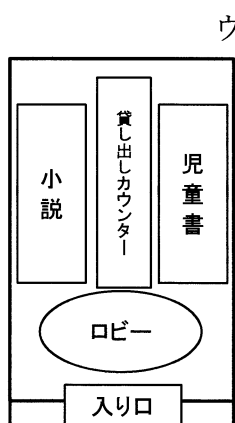
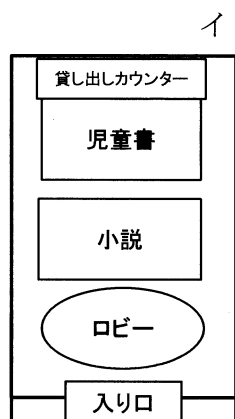
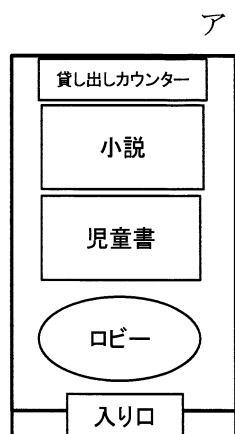
問三 部①「うん」、②「えー」、③「う」は、それぞれのどのような気持ちを表現していますか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア. 図星を突かれ仕方なく納得する気持ち。
 イ. ほめられたようで、鼻高々になる気持ち。
 ウ. 念願がかない、晴れ晴れしい気持ち。
 エ. 説得された内容に合点が行かない気持ち。
 オ. 思いがけぬことに驚き、落胆する気持ち。

問四 部③「わたしの本の先生でもある」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア. 「わたし」に本の選び方や読み方、楽しみ方などを一から教えてくれる先生であるということ。
 イ. 「わたし」に本の鑑賞の仕方や紹介の仕方を面白おかしく教えてくれる先生であるということ。
 ウ. 「わたし」に本を通して、大人とは何であるかを丁寧に教えてくれる先生であるということ。
 エ. 「わたし」に大学を出て司書の資格を取るための手立てを教えてくれる先生であるということ。

問五 内の文章の説明を表した図として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。



問六 — 部④「怖いのではなく、厳しい人なのだ」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア. 常に笑顔を見せてくれる人ではなく、よいことをした時だけ笑いかけてくれる人だということ。
- イ. いつも怒っているわけではなく、何か気に入らないことがあった時にだけ怒る人だということ。
- ウ. むやみにしかる人ではなく、ルールを大切にし、誇りを持って仕事をしている人だということ。
- エ. 誰にでも優しいわけではなく、本を何冊も借りてくれる人に対してだけ優しい人だということ。

問七 — 部⑤「常連の特権だと思う」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア. 図書館をよく利用しているから、図書館の人とも顔見知りであり、打ち解けて気軽に話ができるということ。
- イ. 図書館をよく利用しているから、図書館の内部をよく知っており、必ず人から声をかけられるということ。
- ウ. 図書館をよく利用しているから、図書館を大切に思っており、勤めている人から一目置かれているということ。
- エ. 図書館をよく利用しているから、他の人よりも多くの図書を借りられ、期限を過ぎても怒られないということ。

問八 — 部⑥「今日はどんな出会いがあるだろう」を具体的に述べている部分を文章中より十五字以内で抜き出して答えなさい。

問九 — 部⑦「編み物の本やお料理の本」などのように、日常の仕事や生活で役に立つ本をまとめて何と呼びますか。文章中より三字で抜き出して答えなさい。

問十 空欄 ⑧ に入る文を、空欄の前後を参考に考え、二十五字以上、三十字以内で答えなさい。

問十一 空欄 ⑨ に入る文として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア. 図書館で待っているの
- イ. 図書館で働いているの
- ウ. 図書館に來ていないの
- エ. 図書館を知っているの

問十二 — 部⑩「それ、絵本じゃないのよ」とありますが、「わたし」がそのように言った理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア. 絵本でない本など読めるはずないと考え、絶対に読めるものではないとわからせようと思ったから。
- イ. 見栄をはっているのだと考え、自分に合うものを探すよう納得させなくてはいけないと思ったから。
- ウ. 先に選んだ本を横取りされたと考え、その行動がよくないことであるとわからせようと思ったから。
- エ. 何か勘違いをして手にとったのだと考え、絵の少ない本であるということを伝えようと思ったから。

問十三 文章中の「わたし」に関する説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。また、その記号を選んだ理由（根拠）を場面の内容にもふれつつ、「くから。」につながる形で、四十五字以内で説明しなさい。

- ア. 一人の世界が好きで、本の世界に入りこんでしまうような、少し不思議な子。
- イ. 好奇心旺盛でありながら、思いやりもあり、物事を冷静に考えられる賢い子。
- ウ. 感情豊かで、ときどき情熱や強い欲望に動かされてしまう、とても元気な子。
- エ. あまり人に関心がなく、いつも物事を順序立てて考える、冷たく無感情な子。

二 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の――部の言葉を、漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 食糧をチヨゾウする。
- ② ゲキヤクの取り扱いに注意する。
- ③ コウセイに名を残す。
- ④ 国民の期待を担う仕事。
- ⑤ 発作的に行動してしまう。

問二 次のそれぞれの三字の熟語には、まちがって使われている漢字が一字ずつふくまれています。それを見つけて、正しい漢字に直しなさい。
(解答用紙には、正しい漢字のみ答えてください。)

- ① かんいっばつ 感一髪
- ② かみひとえ 紙一会
- ③ こういってん 好一点
- ④ ふじみ 不死見
- ⑤ こざいく 子細工

B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の慣用表現の（ ）には色を表す語が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

- | | | | |
|---|----------|---|--------------|
| ⑤ | 腹が（　　）い | ： | 心に悪だくみがある。 |
| ④ | （　　）息吐息 | ： | 弱ったときに出すため息。 |
| ③ | （　　）色い声 | ： | 甲高い声のこと |
| ② | （　　）恥をかく | ： | ひどい恥をかくこと。 |
| ① | （　　）目で見る | ： | つめたい目つきで人を見る |

C 文法・言葉づかいに関する問題

問四 次の敬語に関する表の空欄①～⑤に当てはまる言葉をそれぞれひらがなで答えなさい。ただし、「くれる・られる」、「おくになる」「くなさる」「おくする」という形以外で解答しなさい。

ふつうの語	尊敬語 そんけいご	謙讓語 けんじょうご
食べる	召し上がる	① 参る
行く	② なさる	③ 申す
言う	④	差し上げる
与える	⑤	

問題は以上です。

